

---

# 流賊やってる龍族の少年

yuzoku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流賊やつてる龍族の少年

### 【Nコード】

N5228P

### 【作者名】

yuzoku

### 【あらすじ】

現代よりずっと未来のお話なんです。内容はSFというより、ファンタジーや冒険マンガに近い感じ。です。

主人公であるリュータは「龍族」という種族であり、またモノの？流れ？を自在に操る？流賊？とも呼ばれる風使いの少年。そんな彼が、雷使いのツンデレ少女など、いろんな仲間と出会いながら旅をしていく物語となっております。

基本的には？能力？を使ったバトルメインでその中に、主人公たちのその世界に住む人々の人間ドラマを盛り込んでいけたらと思います。

## 銀髪金髭の龍族、さすらいの流賊

昔々あるところにおじいさんとおばあさんが…、ではなく静かな森の中に少年が一人。時は西暦で言つと1万2017年。

テントの中で、少年は気持ちよさそうに寝ている。白銀の髪に浮かぶ、メッシュのように入った黄金色の二筋ふたすじが見える以外は21世紀当時の人間とさほど変わらない。

少年「ふあゝ、よく寝たわゝ」

少年は起きるとすぐにテントを出て、何やら構えをとって目の前のテントに凝視し始めた。するとテントがひとりでに折りたたまれていく。

ただしこの時代の人は、21世紀では考えられないような特殊能力を持っているのだ。彼の名前はベアード・RYU・リユータ、17歳。種族は龍（Ryu）族の、流（Ryu）賊。流賊の人たちはモノの？流れ？を自在に変えられる。今はテントの周りの？空気の流れ？を操作してテントを畳んでいたのだ。彼が愛用しているのは、『流賊特製の骨組みのないテント』であったが、熟練の流賊たちはコンクリートの家を壊すほどの強力な？空気の流れ？を操ることもできる。

そして、彼の銀髪に混じって金色に輝くの2つの筋が『龍の髭ヒゲ』に見えるのが、『龍族』という二つ名でも呼ばれている由縁である。たいていの種族は、この特殊能力の種類を表す？賊？と、その種族を象徴する『族』という2種の名前を持つ。この時代の人々の間では、分かりやすい『族』の名前の方が親しまれている。

少年は荷物をまとめると歩き出した。先程と同じように前方向へ空気の流れを生み出して目の前の枝をどかしながら、森の出口へ向けて進んでいった。

普通の？賊？なんて、どこの世界でもこんな感じ。

先程森から出てきた少年リユータは、めちやくちや目立っているくらいの大旗を掲げて、街中を散策している。なんで彼がこんなド派手な格好をしているのかというと、

（やったー、町までこれた！スツゲーおなか減ってきたなあ。山の中じゃあ、ろくないもん食べてなかったし〜でも金ないし…アツそうだ！）

安易な思いつきから始まり、大きな旗にでっかく『なんでも屋やります！』の看板を掲げてみた。目的は街の人達のトラブル解決と、もう一方はもちろん自身の小遣い稼ぎである、

我ながら素晴らしい作戦だ、とか思いながらユータがのりくらり歩いていると、目の前から18才前後の金髪少女が「あっ、その少年！助けて〜」と叫びながらやってきた。その後ろには『いかにも』といった感じの悪そうな方々が来っちゃてる。

（この状況って女の子を悪党から守るっていうやつ？なんてめっちゃベタなシチュエーションだあ〜！やばいすぐくテンション上がったきた！！！！）

そんなことを考えながらも、リユータは戦いの準備だけは忘れていない。

「おい兄ちゃん、知り合いなのかい？？言っとくがその娘のことなんか気にせずおウチに帰ったらどうや？」

「なんたってオレたち、名前を言っただけでなく泣く子も黙る山賊

集団、マウンテンゴリラなんだからな！」

「ふ〜ん、で??」

「けんか売ってんのかおめー!!」

「このクソチビに『人生の厳しさ』を教えてやんないとな〜!!!  
野郎どもかかれ〜!!!」

突然山賊集団はリュータに切りかかってきた。

「ああそうすれば話は早いね、いいよ〜お前ら相手なら楽勝そうだし」

少年の方は白銀色の長刀を鞘からぬき、すでに構えている。

「ハゲイル・ストリーム」

リュータが刀を振るった途端、もの凄い暴風が吹き荒れた。

「うおおおおおお… あ〜 助けて〜 死んじゃう〜」

リュータの放った技で山賊は全員吹き飛ばれていった。

そんな光景をよそに金髪少女は、この子強そう!しばらくはついていこうかな。なんて1人で小さくうなずいていた。

## SとMの雷族、+と-の来賊

「キミ、けっこう強いんだね！ありがとう助かった」

あつ、アタシの名前はテイングリー・R a i・リカ。自分がシビレルことも好きだけどそれ以上に誰かをシビレさせることが大好きな18才 よろしくね」

「ああ自己紹介とかそういうのいいから『なんでも屋』として助けた料金ちよーだい！オレ一文無しな上に、腹減って死にそうなんだよねー！」

「なんだ、おなか空いてるんだ、じゃ今回の報酬は昼ごはんをおごりつてことでイイ??」

「あゝそれじゃそれでいいや。」

### とある定食屋

「ぶはあゝ食った食ったあゝ。ごちそう様！！あつそういうえはなんでアイツに追われてたの？」

（この子1人で10人前も食べやがった…）「ああ、アイツらははただの『山賊』よ。自分たちの？能力？の修行を諦めて、他の種族のモノを奪ったり盗んでたりして生活してるやつら。迷惑だし、やることも考え方も古すぎるし、ホント何千年前の生き物なのよ！つて感じ。」

「そういうアンタは何かの？能力者？なんだろ?? 自分の能力で返り討ちにすれば良かったのに。」



「アタシにも色々事情があるの！。そうよ、アタシは物質のプラスイオンや電子を引き寄せたりできる？来賊？。まあ通称は『雷族』と呼ばれてるわね。」

「えっプラスイオン？？あ、ごめんわかんなかった。能力の説明も一回説明して！」

「だからあ、空気中のイオンをを操作することで自分の周囲や攻撃対象に電位差を生み出して、

…まあ、太古の昔のゲームでいうところのピカチュウってところね。」

「ああ分かった！要するに電気ネズミならぬ電気ニンゲンてことかあ〜」

「もういいわ、それで…」

で、その電気を貯めるために使うのに大事な？電気玉？を盗まれたわけ。やつらのアジトに忍び込んだはいいものの、伝導率の良さげな金属の装飾品に目を奪われちゃってるうちに見つかっちゃって、てへ。それで街まで逃げてきたってわけ。

それよりさ、アンタはなんで一銭も持たずに街を歩いてたの？」

「オレは『龍族』のベアード・Ryu・リユータ。17才。オレ達一族のもう一つの名前は？流賊？だから、大人になる前に一度世界を？流浪？しなきゃいけないっていう掟があるんだあ。」

それで15歳の誕生日になって家族で楽しくパーティーやってたんだけど、次の朝起きたら急に知らないおっさんと2人きりにされてさ、そんで「これからはワシをマスターと呼べ。」だぜ。それから2人で各地を旅をして回ってたんだ。ま、今はそのマスターともはぐれちゃったんだけど。とりあえず、一人前になったら一族の村

や親の元に帰ってもいいらしいんだ。」

「ふ〜ん。ずいぶん難儀なこと背負ってる一族もあるのね〜。じゃあ今はその修行中って感じ?」

「1人になってから10日くらいかな。それまでは山奥で暮らしてたから木の実ばかり食ってたんだよね。今日は旅に出てから初めてまともなメシが食えたよ。リカありがとう!」

「なるほどね〜。じゃあさ、アタシの電気玉取り返すの手伝って!一週間分の食事代くらいは出すからさ!」

「いいよ〜。そろそろ腕試しがしたくなってきたことだし!」

## 洞窟の中だと力が出ない

「ダレだお前たちは!？」

「名乗るほどのものじゃありませんよ。」

「ここは泣く子も黙るマウンテンゴリラのアジトへの入り口だぞ？  
ママに聞いてなかったか。」

「ハハハハッ！ちびらないうちにとつとと帰りな。」

「ああうぜえ、ハゲイル・ストリームヱ！」

「うわあ〜」

「ちよつとお、こんな真正面から乗り込んで大丈夫なの？」

「大丈夫、見たろオレの今の技のスゴさ？能力なし？の相手なんて  
楽勝だつて」

「ならいいんだけど…」

2人はアジトである洞窟の奥に進んでいった。

「また敵か。ハゲイル・ストリームヱ」

ふわっ

先ほどとは違い、そよ風しか巻き起こらなかった。

「あれおかしいな、ハゲイル・ストリームヱ！」

同じだった。

「もしかしてアンタ達の技ってこういう風のない所だと力が半減するんじゃないの？」

「あっ、そうだった、すっかり忘れてた！」

リカはもうあきれ顔だった。

「お2人さん、それでおしまいなら今度はこっちからいかせてもら  
うぜー!」

「やっべ、どうしよっ」

「アタシに任せて!アンタはまずそこに目をつぶっているのよ。」  
「ああ。」

「はい目を開けて。」

「で、どうするんだ?」

「オトリになって頑張って逃げてね」

「そっいうことか」

リカはとっくに遠くの方へ逃げ出していた。

「じゃあない、ここは純粹に剣術でいくしかないか」

相手は3人だったので?能力?を使わずとも勝てた。

と思っていた矢先に怒号が響く。

「てめえうちのアジトでこんなことしてただで済むと思っなよ!」

「やっべあの人数は相手にできねえ逃げろっ!」

リュータの逃亡劇は2時間にもおよんだ。

へ、別にお礼言われるのなんて当たり前なんだからね

「人のアジトでさんざん暴れまくってくれたな。」

「へっへっこれで逃げ場はないぜ、ガキンチョ！」

今リュータは20人ほどの山賊に囲まれている。

「この人数はマジでシャレにななんねえな。でもやるしかない！」

そう覚悟を決めて剣を構えた瞬間だった。

「ハデイフューズ・サンダー！」

ビリビリビリ〜

「ぐわあ〜〜！」

「なんだなんだ？」

リュータを囲んでいたうちの、片方の通路側にいた山賊がのきなみ倒れている。そこに一人立っているのは、

「リカー！」

「リュータどいて！」

訳の分からないまま言つとおりにする。

驚いている残りの山賊とリュータをよそに、リカはにやりとすると『金属の玉』を体の前をかまえた。

「ディフューズ・サンダー」

ビリビリビリ〜

「ぐわあ〜！」

反対側にいた山賊たちもみんな倒れてしまった。

「これいったいどういうことだよ？」

「驚いた？これがあたしたち雷族の能力よ。？電気玉？さえあればこの通り。っていつか会った時に説明したはずだけど。」

「ああそついえばビリビリ人間って言ってたもんな。」

「誰もビリビリ人間って名乗った覚えはないわー！」

ここで冷静さを取り戻したり力が言った。

「さ、ここにはもう用がないし出ましょ。」

「おう！」

「ぶはーやっぱり外の空気はうまいなあ〜」

「ホントあなたにはイロイロ驚かされたわよ。自分の能力の弱点くらいちやんと勉強しときなさいよね。」

「オレ勉強とかキライなんだよ〜。それよりよくもあの時は見捨てたりしやがったな！」

「あれは『作戦』っていうのよ。『なんでも屋』なんだから体を張ることも一つの仕事でしょ。」

「一週間分のメシ代じゃ割に合わねえよ！」

「あんなにバカみたいに食えるんだったら十分に元とれるわよ！そ

れに、結果的にアタシがちゃんと助けたじゃないの！」

「ああそっか、ありがとうりカ。」

「わ、わかればいいのよ、わかれば」

心なしかリカの顔が赤くなっていた。

## おじいさんのあったかいスープ

「で、なんでついてくんだよ？」

「アタシにはやりたいことがあるの！でもそれを見つけないのは大変なの！それまでアンタの流浪の旅とやらに付き合っただけよ。」

「なんでそんな上から目線なんだ？」

リユータは若干の理不尽さを感じつつも、持ち前のノー天気さで次の瞬間にはまあいいか、と考えていた。

2人が仲良く(?)話しながら3日ほど歩いていると村が見えてきた。

「やっと久しぶりにまともなメシが食える。」

「アタシはゆっくりお風呂に入りたいわ。」

とりあえず村で一番最初に目についたおじいさんに声をかけてみた。

「こんにちは、あの〜困っていることあったらなんでもするんで、メシ喰わしてもらってもいいですか？」

「それとお風呂つきの宿なんか泊まらせてもらえるとありがたいんですけど。」

「珍しいの、旅のお方なんて。…でも悪いが今のこの村じゃ満足なメシは出してあげられないんじゃない？」

「どうしてですか？見たところ周りにたくさん畑があるみたいですけど。」



「わしらは菜族（裁賊）。もともと食物を育てることがなりわいみたいなもんじゃ。」

「それじゃなんで……」

「襲われてるんじゃ」

「何にですか？」

「牛や馬や羊じゃ」

「菜族つてそんな弱いのか？」

「コラ、リユータ失礼なこと言うんじゃないの！ なにか事情がおありなようですが。」

「娘さんの言う通りじゃ。わしらでも普通の野生動物、ましてや草食動物なら柵を立てるなりしていままでは畑に近づけさせないようにしてこられた。しかし最近なぜか知らんが動物たちが狂暴化してわしらでは手が付けられんのじゃ。」

「なるほどねえ。じゃあオレらが退治してやるよ。」

「そうよおじいさん、こう見えてもアタシらけっこう強いのだよ！」

「それは頼もしい！是非ともお願いしたい。それでは今日はもう遅いのでゆっくりわしの家で休むがいい。」

案内されたおじいさんの家には一人の少女がいた。年は大体12才といたところか。

「おじいさん、あの子はお孫さんかなにか？」

「その子はナオ。どこの一族のもんかは知らんが、ある日村に一人でやってきおった。こんなに小さな子を一人にはしておけんのでわしのところ預かっておるのじゃ。」

「迷子なのか？」

「アンタじゃあるまいしそれはないわよねえ？」

「オレも迷子じゃねえー！」

「悪いがその子はなかなか他人とは話さんよ。わしも名前を聞くだけで一か月もかかったからな。それ以外のことはまだ聞けておらん。」

「そーとーな人見知りちゃんみたいだな。」

「でもどうしてこんな小さな子が一人でさまよってたのかしら。」

「ささっ、そんなことよりメシにしようじゃないか。わびしいが食べんよりはましじゃぞ。」

「ありがとうじいさん！うまそうなスープじゃん！いったただきまゝす。」

「奥に空いている部屋があるから2人で使っておくれ。」

「えっちよっと待ってコイツと2人きりで寝ろっていうの？」

「なんじゃ、お二人さんは恋人じゃないんか？」

「じいさん勘違いすんなよ、誰がこんなド変態女と！」

「こっちこそこんなおバカさんと恋人だなんて末代の恥だわ。」

「なんだとー！？」「なによー！？」

「しかし困ったのお。他に部屋はないし。」

「ごめんなさいおじいさん、無理言っただけでもらってるんだし2人で寝るわ。」

「オレもじいさんのために我慢するぜ。」

部屋に入ると2人で寝る前に話していた。

「それにしてもじいさんてオレたちにしても、あのナオって子にしてもお人よしなんだな。」

「そうね。なんとしてもその動物どもを退治してあげたいわ。」

こつして夜は更けていった。

## 草食系でもご注意を

「そろそろ来る頃じゃ。」

リユータ達がおじいさんの家でお世話になってから2日後のことであつた。

森の奥からけたたましい蹄の音が聞こえてくる。

「くる！」

「オレに任せろ！」

「ゲイル・ストリーム」

「ダメだ、体がデカすぎて吹き飛ばしきれない。」

「それにその技じゃ、次また来ちゃうじゃないの。」

「ディフューズ・サンダー」

一瞬動物たちはひるんだがそれでもつつこんでくる。

「うそ、アタシの攻撃もほとんどきいてない。これじゃまた畑がやられちゃうー！」

「あっ、もしかして」

「なによ？」

「ごめん集中するから時間稼いでて。」

「よくわかんないけど分かったわ。」

「ディフューズ・サンダー」！ 「ディフューズ・サンダー」！

「ディフューズ・サンダー」！

リュータは刀をしまい目をつむっている。

「ピュリファイ・ストリーム」

不思議な優しい風があたりに広がり、動物たちを包み込んでいった。

するとみるみるうちに動物たちの大きさが小さくなり、動きもおとなしくなった。

「ど、どういうこと？」

「見た通り元はただの動物たちさ。ただ何か邪気のようなもので狂暴化していたらしい。」

「なんでそんなこと知ってんのよ？」

「昔マスターと旅してた時に同じようなことがあったのさ。」

「こりゃたまげた！お願いはしたがほんとに解決してくれるとは！ほんとに助かったよ、ありがとう」

「なに、『なんでも屋』として仕事したままでだよ。その代りあったかいスープと寝る場所をもらったしね。」  
「それでもわしらにとっては大きなことなんじゃよ。改めて言わしてくれ、ありがとう。」

照れくさそうに笑うと、リユータとリカは旅立っていった。

## 人見知りの武族、顔見知りの似賊

「待つてくださーい」

後ろから声がある。リユータとリカが振り返ると少女がこちらに向かって走ってきているのが見えた。

「ナオじゃない、どうしたの？」

「オレ達なんか忘れものでもしたっけか？」

「違うんです。わたしも旅に連れて行ってください！」

「いくらなんでもキミみたいな小さな子は連れていけないよ。それにじいさんが心配するじゃないか。」

「おじいさんにならさつき旅に出ることを伝えて、いままでのお礼も言ってきました。」

「それでもダメなものはダメよ。いい子だからおじいさんのところに帰りなさい。」

「じゃあこれを見てから決めてください。」

「リターン・エミュレイト」

そう言うとナオの体が次第に大きくなっていく。肩までかかっていた長い髪も、すっきりとした短髪になった。前髪は右側だけが垂れ下がっている。

あどけない少女がほんの数秒の間に15、6才の少年の姿に変わっていた。

2人は驚きで声も出ない。

「ビックリさせてしまつてごめんなさい。でもこれがボクの本当の姿なんです。ボクの本当の名前はミミック・N・ナオト。体の変形が得意な『弑族』(？似賊?)なんです。お2人の足は引つ張らないようにするのでどうか一緒に旅に連れて行ってください！」

「でもそんな急に出て行つたらおじいさんが悲しむわよ?」

「おじいさんにはこの姿を見せたら「分かつた、行つておいで」と言つてくれました。たぶんボクの正体にもうすす気づいていたんだとは思つんです。それでも何も言わずにおいていてくれました。でも、お2人に会つて決心しました。ボクは自分に何ができるのかを知るために旅に出たいんです！」

「そつかわかつた。」

「ちよつとリユータ。」

「じいさんがいいつて言うならそれでいいじゃないか。見たところなかなかおもしろそうな?能力?でもあるみたいだし。」

「そうねえ、じゃあよろしくね、ナオト。」

「やったー！」

こうして旅の仲間は3人となった。



お酒なんか飲まなくっても楽しいぞ

道中、新しい旅の仲間、ナオトについての話で盛り上がっていた。

「それにしてもおもしろい能力だよなあ、なあオレらの姿にもなったりできるの？」

「ええ、もちろんです。一度相手の名前と姿を見てしまえば可能です。」

ハリュータ・エミュレート

数十秒するとそこには2人のリュータが現れた。

「すごい！カンペキにそっくりね。まあリュータ二人はいらないけど」

「どういう意味だよ！」

「ねえんねえ、アタシにもなってみてくれる？」

「いいですよ。」

ハリカ・エミュレート

今度はリカが2人になった。

「なあそれって体の方もそっくりになってんのか？」

「そうですよ。」

そう言っリカハナオトが服を脱ぎ始めようすると、

「何見ようとしとんじゃボケー……！」

と、本物のリカからリュータとリカ（ナオト）に跳び蹴りが入る、

「別にオレはどこまで正確に再現できてるかどうかを確認かめるためにだなあ…」

「絶対ウソよ！あれは完全にいやらしい発想をしている時の男の目だったわ！」

「誰もお前の貧乳なんて興味ないわ！」

「すみません！ボクがそういう男女間の意識が薄かったばかりに」「いやナオトが謝ることじゃねえよ。オレがからかいすぎただけだ、悪かった。」

「わ、わかればいいのよ、わかれば。」

「そういえばあそこのおじさんのところにいるまではドコでナニしてたの？」

「瞬ナオトの顔が暗くなる。」

「…暗殺です」

「え、まじでか？その年で？」

「忒族は昔から暗殺家業を生業としてきました。ボクも5才の頃には人を殺しています。」

ここでリュータとリカの息が止まる。

「ボクたちは体のある部分を一時的に強化することで常人のそれよりも高い運動の力を得ることができます。それを利用して暗殺家業をしていたわけなんです。ちなみに体の大きさも元のプラスマイナ

「ス2割程度なら変えられますのでその大きさの範囲内でしたら別人になりすますこともできるんです。」

「まさに生まれながらにして暗殺にうってつけの？能力？を持つてるってわけだ。」

「…はい。」

「ちよつとリユータ、言葉選びなさいよ！」

「それじゃあなんでわざわざ一族から飛び出してきたんだ。」

「人を殺すのがイヤになりました。名前も知らない人の人生を簡単に奪ってしまつてしまつ、そのことがすごくコワイんです。相手が知ってる人ならなおさらです。」

「そつか、じゃあそのお前の？能力？を人のために役立つような道を探したいってわけか。」

「はい！」

「あつ、村が見えてきたみたいだぞ。」

「よく見て！近くに別々の村が2つあるわ。」

「どっちに行つてみましょうか？」

「そりゃやっぱりデカイ方からつしよ！レッツゴー！」

「単純ね。」

「うっさいな、なんか文句でも？」

「べつつにい〜」

「まあまあ2人とも落ち着いて」

早くも、この会話が3人のお決まりのパターンになりつつあるよう

である。

「よう、旅のお方かね。」

「はい。」

「ようこそこのバンケット村へ。この村の魅力はなんといっても酒だよ。兄ちゃんたち、景気づけにビールでも飲んでいくかい？」

「いえ、オレ達未成年なんで……」

「そりゃ残念だな。だが酒以外にもウマイもんはいっぱいあるから楽しんでつてくれや。」

「ありがとうございます。」

「なんだかやけに威勢のいい村ですね。」

「ほらな、大きい方にしといて正解だっただろ？」

「アタシはもうちよつと落ち着いてる雰囲気の方が好き、なんだけどだなあ。」

「ささつ、細かいことは気にせずせっかく料理も飲み物もたくさんあるんだし早く食べましようよ。」

「そうだな」「そうね」

なにかと気苦労の絶えないナオトであった。

「ぶはー食った食ったあ。」

「ホントアタシも大満足。」

「ボクもです。」

3人が幸せ気分浸っていると、村の外れで大きな音がした。

「近所トラブルは高くなりますよ？」

「何があつたんですか？」

「あくありやコウ村の連中の仕業だよ。」

「コウ村つてすぐ隣にあつた村のことですか？」

「そつだよ。あそこの連中最近何かと理由をつけてはこっちを攻撃してくるんだ。」

「攻撃」という言葉に反応してリユータが村の人に尋ねた。

「ねえおじさん、オレ達『なんでも屋』つてやってんだけど、なんかできることないかな？」

「そりゃあのム力つく？砲撃？をやめさせてくれれば助かるんだが。こつうことは村長に聞いてみてくれ。正直言つとな、オレ自身最近のこの事態についてよく分かつていないんだ。」

「そつか、助かったよおじさん。オレら村長さんそこ行つてくるわ！」

「よつこそ旅のお方。わしが村長のトーストじゃ。して、この村とコウ村で起こつとることを聞きたいとな？」

「そつです。」

「数か月前のことじゃつた。今までわしらとコウ村は仲良くとは言わんでも何一つ争いなく過ごしておつたのに急に？砲撃？を始めたのじゃ。」

「その砲撃とはなんですか？」

「わしらバンケット村はみな大酒飲みの飲族（引賊）じゃ。それに

対してコウ村の連中うちゅうのはヘビースモーカーの咳族（斥賊）なのじゃ。その斥賊としての？能力？が？砲撃？なんじゃよ。？能力？で空気を弾き飛ばすので弾丸いらすというわけじゃ。」

「ふ〜ん、なるほどね〜。」

「大してワシらは？引くという能力？しか持つておらんから来た空気の弾丸をそらすことしかできんのじゃ。」

「防戦一方つてわけなのですね。」

「その通りなんじゃ。わしらとしては言われのないケンカを貰うのもバカらしいのでこのままにしておるが、若い衆は近いうち攻め込んでいこうといきりたつておる。」

「そりゃちよつと穏やかじゃないな。」

「旅のお方、相応の謝礼は出すから、コウ村からの？砲撃？を止めてくださらんか。」

「わかりました！喜んでうけたまわります！」

リユータはそう言つと、村長の家をあとにした。

## 愛煙奇縁はほどほどに

「ねえ、詳しい情報はなんにも分かんなかったけど、なにかいいアイデアでもあるの？」

「ない！」

「あきれた。じゃあこれからどうするっていうのよ？」

「とりあえずコウ村の人に話を聞いてみるというのはどうでしょう？」

「おお、ナオトナイス！まさにオレが今言おうとしていたことなんだよ。」

「ホントかしら。でも現状それしかないみたいだし、行ってみますか！」

「アイアイサー！」

「こんにちは」

「プハーツ、ゴホツゴホツ。おお旅のお方かね。」

「そうです。」

「ゴホツ、ようこそいらっしやっただ。ゆっくりしてらっしやい。どうだい、まずは一本いかが？」

「ありがとうございます。でも未成年なので遠慮しておきます。すいません、その前に一つお尋ねしておきたいことがあるのですが。」

「なんだい？」

「最近コウ村の方に？砲撃？をされるといいうワサを聞いてやってきたのですが、何か知りませんか？」

ナオトがそれを言うと、急に村人の目つきが鋭くなった。

「あのむかつくバンケット村の連中がしたことを考えれば当然だよ。こりゃ当然の報いさ！」

「あの、何をしたっていうんでしょうか？」

「近々バンケット村中の者総出でコウ村を？引く？っていうんだからね！」

「えっ、それってどういう…？」

「なんでも村ごと引っこぬいて崩壊しようって企んでんのさ！」

これには3人の目が丸くさせられた。

「そんなまさか、」

「それはどこで誰が聞いたのですか？」

「ウチの村長が、ある時親切な旅人に聞いたらしいよ。」

「では村長さんのところでまたお話うかがってみます。お話ありがとうございます。」

腑に落ちない顔で3人は聞いた村長の家まで向かっている。

「村長さんもバンケット村の人もそんな人たちには見えなかったけどな。」

「アタシもそう思う。それにコウ村の人も村の感じも思っていたほど悪くはないと思うのよね。」

「なにか『裏』がありそうですね。」

「ワシがコウ村の村長スロートだ。よく来てくれたな旅人よ。」

「いえこちらこそ。少しお尋ねしたいのですが、少し前に現れ、バンケット村の人がコウ村を？引く？という話しをしたのはどんな方だったのですか？」



「そりゃあ、なんとも愛らしい顔をした娘でのお、お近づきのしるしにと上等の葉巻までくれたのじゃ。なんともできた娘じゃった。」  
本来渋い顔である村長の顔が、若干間の抜けた顔になっている。

「で、その娘が言ったことを真に受けて、それから警告の意味を込めて？砲撃？をしているというのですね。」

「その通りじゃが何か問題があるかえ？」

ここで、夢見心地な村長をしり目に、3人はヒソヒソ話を始めた。

(もうあの村長完全にその娘にヤラレちゃってんな。)

(もう、これだから男はイヤなのよ。)

(そう単純な話でもないみたいですよ。)

ナオトはヒソヒソ話を切り上げると村長に話しかけた。

「村長さん、この姿に見覚えありませんか？」

「ハリオ・エミユレイト」

ナオトの姿が、女性の姿に変わっていく。

「おお、リオちゃんではないか！どうということじゃ？」

「これはボクのか？能力？でアナタが会ったというリオさんという人の姿になっただけです。これで確信しました。」

そう言うとナオトは元の姿に戻った。

「このリオという女は鎖族（詐欺）です。斥賊のあなた方のように派手な？能力？は持ち合わせていませんが、巧みな話術と物品、今

回は葉巻の中に人を惑わすようなものを含ませておくのが得意な一族です。」

「もしかしてワシは騙されていたというのか？」

「そうなります。」

「なんとということじゃ、ワシは、ワシはあゝ！」

「今すぐバンケット村に行って今までのことを謝罪してきてください。」

「わ、わかった。できればじゃが旅の方々も御同行願えんか？」

「もちろんですとも。」

こうして2つの村の争いは何事もなかったかのようにキレイになくなった。

「2つの村からたつぷり謝礼金ももらえたしウハウハだな。」

「でも後味悪いつていうか…そのリオって女なにがしたかったの？つて感じ。」

「前に会った時から得意の？騙し？はやっていたようですが、ここまで大きな問題に発展するようなことはしていませんでした。」

「なにかこの世界でイヤなことが動いている気がする。」

「え、リユータ今なんか言った？」

「あ、ああマスターが前によく言ってた言葉なんだ。でも今のオレにはその意味はイマイチよくわかんねえ。」

## 近づきたくなる萌族、近づくと危ない燃賊

リユータ達3人は次の村へやってきていた。

「今度の村はなんだか煙突がいつぱいあるわね。」

「なんか工場みたいだな。」

村から10歳くらいの女の子が出てきた。

「あ、第一村人はっけーん！」

近寄って話しかけた。

「お嬢ちゃん、この村ではなにをつくっているのかなあ？」

「お嬢ちゃんじゃない！」

急に怒られたので3人は戸惑っている。

「あつ、ごめんもしかして男の子だった？」

「それはもつとちがーう！あたしはれっきとしたレディよ、これでも27才なんだから！」

ここでナオトが思い出したように言った。

「もしかして『モエ族』の方ですか？」

「そうよ。」

「なるほどねえ〜？萌賊？かあ。この愛くるしい姿で？萌え？させて相手の戦意をなくさすという？能力？なのね！ああもつかわい過ぎてやられちゃいそうだわ！」

「落ち着いてくださいりカさん。それはちょっと違うんです。」

「ちよつとどころか全然違つわよ！あたしらは？燃賊？。自分の体を？燃やす？ことで周りのモノを燃やしたり温めたりするのが得意な一族なの！」

「じゃあ『族』の方の漢字は何なんなのよ？」

「それは…」

「それはやつぱり『萌』らしいんですよ。なぜか大人になつても少女や少年の姿のままだからそう呼ばれるらしいです。だからリカさんの言つたこともあなたが間違つてはいないんです。」

「そ、そうとも言えるわね。とにかく、アタシの方が年上なんだから3人とも敬語を使うこと！」

「はい！」

「あたしの名前はスプラウト・M・メイ。あなた達は？」

「オレは龍族のリュータつて言います。そしてこの女は常盤台のレベル5の…」

「あたしゃレールガンなんかうてませんよ！ あつ、先ほどは失礼いたしました。アタシは雷族のリカつています！」

「ふふつ、いいコンビみたいね。」

「ボクはナオトつていいいます。あの、種族は…」

「武族でしょ。」

「分かるんですか？」

「そのアシンメトリーの髪型は、なんにでも化けられる武族が、自身のアイデンティティーとしてわざとそうしてるっていうのを聞いたことがあるわ。別にあなたが暗殺屋でもあたしは気にしないわよ。別に殺されるようなことした覚えもないし。」

「なかなか肝つ玉のすわつた『おねえさん』みたいですね。」

「ようやくわかってきたみたいだね。ではあたし達の村へようこそ！」  
「そ！」

## ゴーレムが来たぞー

一行はメイに連れられて村へ入って行った。

「やけに仰々しい壁で囲まれているんですね。」

「ほんとだ、しかも所々崩れてるぞ?」

「それは…」

「あの、いちおうアタシ達『なんでも屋』やりながら旅やってるんですけど、困ってることとかあれば言ってください。」

「実はね、今あかし達の村ではゴーレムに襲われてるの。」

「ゴーレム?なんじゃそりゃ?」

「リユータくん。い・い・な・お・し」

「(めんどくせつ。)ゴーレムとはなんなんですか、メイさん。」

「ゴーレムっていうのは体が石や砂なんかでできたモンスターのこ  
とよ。」

「そんな生物いるんですか?ちょっと信じられないんですけど。」

「ムリもないわ。ある日急に現れてあかし達もビックリしているん  
だもの。」

「じゃあなんで名前知ってるの…知ってるんですか?」

「それは相手がわざわざ名乗ってきたからよ。」

「えっ、ゴーレムしゃべるんですか?」

「しゃべるのはそれを?操ってる?人間。自分で?操賊?だと言  
つてたからたぶん間違いないわ。あかし達は直接触らないと熱を伝  
えられないから?本体?が遠い相手だと手の出しようがないのよね。」

「でも何しにわざわざ襲いに来てるんだろ?」

これはナオトの独り言であったがメイがそれに答えた。

「それもご丁寧に話してくれたわ。元々あたし達の村は？燃やす能力？を活かして鍛冶屋を生業としているのがほとんどなの。それを強引に奪おうっていうんだからあったまきちゃう！」

「なんかまた変なことしてる種族もいるんだな。」

「こらっ、現に困ってる人がいるのにそんなこと言わないの！任せてください。アタシ達が退治してみせますから！」

「言っとくけどかなり強いわよ？」

「オレ達だってそれより強いはず？」

## かしまし操賊娘

「来た！」

遠くの方から大きな物音が聞こえる。しばらくすると村の前には大きな石の巨人、ゴーレムが現れた。

「アタイは？操賊？のアフェリエ。このお団子頭がチャームポイントさ、よく覚えときなつ。オマエラ見ない顔だね、何者だい？」

「なんかめんどくせえ。」

「負けちゃいけないわ！アタシは『雷族』のリカ！アタシだってこのツンツン髪には命かけてますから！勝負よ！」

「おいリカ突つ走んなよ。」

「だってアイツなんかむかつくんだもん！」

「いい度胸だね。アンタ達、やっちまいな！」

ゴウンゴウンと地響きを立てながらゴーレムが迫ってくる。

「ハディフューズ・サンダー」

しかし効果はないようだ。

「オマエ今回も役立たずみたいだな。」

「なんですッテ…たしかにそうみたい。」

「オレの？風？も直接は効かなさそうだし、こうなったら作戦C！

ナオト！」

「はい！」



「スピード・インテンション」

元々細身だったナオトの体がさらに細くなっていく。

「トランスファー・ストリーム」

リユータが放った風に？乗って？、ナオトはゴーレムの体を駆け上がっていく。

ナオトはそのままアフェリエのところまで一気にたどり着き、のど元にかけていたダガーを突き付けた。

「ゴーレムを止めてください。」

「ひい、わかったよ、だからその剣を早くしまつとくれ。」

するとゴーレムたちは動きが止まり、その？生气？がなくなっていた。

「ふう、これでもう悪さはしませんね？」

「あ、ああそうするよ。」

すると次の瞬間、ゴーレムにも勝るとも劣らない奇妙な鳥に乗ってどこかへ行ってしまった。

## 新しい道具と新しい仲間

それから数日、助けてもらったお礼とは別に、『プレゼント』があるというので3人はメイの村に滞在していた。

「ようやく完成したわ、受け取ってちょうだい。」

「なんですか、それ？」

ムチの先端にイナズマ型の金属板がついている。

「名付けて『ライチユウのシッポ』よ！リカちゃんがこの鞭を持つとムチの中が金属製になっていて、先端のイナズマ型の部分に触れると感電してしまうの！」

「わ〜かっこいい！（でも名前は『ピカチュウ』の方がよかったなあ）」

続いて取り出したのは、なにやらピストルのようなものに丸い穴が空いている。

「さらに渾身の出来なのがこれ！『TLV5』！『雷族』特製の電気玉？を装填すると、リカちゃん念願のレールガンが撃てるのよ。？雷？の消費量はハンパじゃないけどこれで一撃必殺の技になるわね。」

「いや別に『念願』ってわけじゃないですけど…でもありがとうございます。」

「あとナオトくんにもいくつか武器を作っておいたわ。？変身後の姿？に合わせて使ってみてね。」

「ありがとうございます！」

「あの、メイさんオレは…?」  
「あなたは背中に立派な剣を持っているじゃない。正直それ以上の者はいくらあたし達?燃賊?でも作れないわ。むしろ誇りに思いなさい。」

「はあ、わかりました。」

「それと、もう仲間なんだから敬語はいいわ。」

「やった!オレ敬語ってかたっ苦しくって苦手だったんだよねえ…  
…っについて来んの?」

「わるい?」

「いや悪くはないですけど…ないけどメイさんには特に旅にできるような理由があるようにも見えないんだけど?」

「リカちゃん、理由がなくなっつて乙女は急に旅立ちたくなる時もあるじゃない?」

「乙女っつてアンタ27才じゃ…」

「さっそく年齢イジリとはいい度胸だなリユータくん。」

「あっつ、あっつっすメイさん。」

「あ、ごめんごめんつい?アツく?なりすぎちゃった、てへっ」

「あんたの場合、シャレになんないだから勘弁してよね」

「でもさっきのはリユータが悪いんだから謝んなさいよ!」

「なんでそこでリカ、オマエがでしゃばってくだよ?」

「なによ?」

「はあ?」

リユータとリカの言い合いはしばらく続き、それを眺めるメイとナオト。

「ふふっ楽しい旅になりそうだね。」

「メイさん楽しんでないで止めてくださいよ〜。ボクいつつもこ

れで苦労してたんですから」

この時からさらに出発までにもう一晩かかったのは、必要だったのか  
そつでなかったのか

## 七三眼鏡の楓族、規律正しい封賊

4人となった一行は次の村を目指して歩いていく。すると向こうから一人の青年が走ってくる。

「どうしたんですか、そんなに急いで。」

「キミたちには関係ない。」

「なによそのむかつく言い方!」

「まあまあ力さん落ち着いて。もしお困りのことがあったら言うてみてください。」

「そうだぜ兄ちゃん、オレたち旅しながら『なんでも屋』ってのやつてるんだ。要するに人助けだな。まあお代はきっちりいただくぞ。」

「: お前たち強いのか?」

「そりゃあもう。これまで巨大化した野獣とかゴーレムとか倒してきたくらいだからな。」

「それではお前たち、いやきみ達に頼みがある。聞いてくれるか?」  
「お安い御用だぜ!」

「申し遅れたわたしの名前はアキヒコ。『楓族』( ? 封賊 ? ) だ。相手の? 能力? を? 封ずる? のを得意としている。」

ここでリユータ達も簡単に自己紹介をする。

「それにしてもアキヒコって変な格好してるんだな。今時メガネって珍しくないか?」

「我々楓族は風俗にもうるさいのだよ。この眼鏡と髪型はその象徴だ。」

「なあ『風俗』ってなんだ？」

ここでリユータが素朴な疑問をぶつけると、リカが答えた。

「アタシそれ知ってる。たしか古代のイヤラシイお店のことよ。」

「キミの知識は非常に偏っているぞ小娘。私が言っているのは規則や風紀のことだ。」

「誰が小娘ですってえ〜!？」

「どうやらこの小娘は自己認識能力も低いらしいな。」

「ぶぐう〜」

ここでナオトがなだめる。

「まあまあリカさんも落ち着いて。」

ここで最年長のメイが話題を切り替える。

「そういえば見たとこ旅人ってわけでもないみたいだけど、なにか訳でもあったりする？」

「そうだった、小娘のせいで本題を忘れるところだった。キミたちのような者を探してわたし一人村を飛び出していたのだ。」

「じゃあその村に案内してもらえますか？」

「ああ、もちろんだとも。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5228p/>

---

流賊やってる龍族の少年

2011年10月8日13時53分発行